

# フィールドワークをベースにした経済地理学研究の回顧

犬井 正

## 1. はじめに

経済地理学をはじめ、地理学は混沌とした現代社会の諸現象の中から空間的秩序を追究する科学である。地理学が地域の空間的秩序を求め、その空間的特性(地域性)を解明するためには、フィールドワークをベースにして築かれた地域研究を重視することにあると筆者は考えている。しかし、理論的枠組みでの把握や観念論的把握、あるいは性急に一般性あるいは法則的傾向を求める地理学者からは、フィールドワークを重視した地域研究は地域への埋没であると批判され、おろそかにされる傾向にある。地域研究を重視することは、一般性や法則性を求める姿勢と決して矛盾するものではないと考えている。それに対して、理論的枠組みや観念論的把握を重視した地理学研究には、人々の生活の仕組みや原理、価値観や思いが把握されていないくらいがあるように思われる。筆者のこれまでの経済地理学研究は、フィールドワークをベースにして築き上げてきたものであり、獨協大学環境共生研究所所長を退任するに当たり、これまでの来し方を振り返ってみたい。

## 2. 挫折が拓いた地理学への道(1967~1973)

大学入学試験で挫折し、斜に構えながら1967年に入学した大学での学びになじめなく、勉学に向かい合うことに背を向けて器械体操部に入部し、来る日も来る日も練習に没頭していた。受験勉強と違って日々の鍛錬が確実に成果として反映され、まぐれの確立が極めて低い器械体操のえも言われぬ魅力に取りつかれていた。入学後まもなくして、東京学芸大学の構内にも全国の大学で吹き荒れていた大学紛争の波が押し寄せてきた。社会の在り方、政治や大学教育の在り様、自らの生き方などを問い直す大学紛争にも講義にも背を向け、ただひたすら器械体操に向き合う日々であった。

しかし、大学2年生の秋のインターカレッジの新人戦を終えてホッとした時、自分の将来を思い悩んだ。大学紛争という時代背景の影響が多分にあり、何のために自分は大学に入学したのかを自身に問い質さずにはいられなかった。

筆者が地理学に興味をもったのは、東京都立北園高校で「地理」を教えていただいた故小峯勇先生(元、帝京大学教授)、深石一夫先生(愛媛大学名誉教授)という二人の恩師の影響が根底にあったからにはほかならない。小峯先生は地形学がご専門で都立北園高校教諭の時に、東京教育大学から理学博士の学位を取得された。当時の新聞に、その偉業が大きく報道されて、北園高校生であった筆者は、様々な教材教具を駆使して生徒に興味深い授業をされている「私たちの地理の先生」が、理学博士になられたことに大きな誇りを感じた。北園高校では1学年の1学期に、霧が峰高原にあった学寮を利用して2泊3日の「観察と観測を中心とした地理野外実習」が行われていた。この時に、ベテランの小峯先生や気候学がご専門の新進気鋭の深石先生に、自分の目で見て、足で確かめ、自分の頭で考えるフィールドワークの醍醐味を教えていただいたのが、私が地理学に興味、関心を抱きだした礎になっていた。

器械体操部を辞して勉学に真摯に向かい合わねばと心が揺れ動いていた当時、北海道教育大学釧路分校に赴任され、「釧路の霧」をテーマにして理学博士の学位を取られた深石先生を、釧路のご自宅に訪ね数日間泊めていただいた。突然であったにもかかわらず、釧路湿原やチャランケチャシ、釧路漁港と霧、太平洋炭鉱などのフィールドワークを行っていただいた。忘れ去っていた地理学への憧憬の念が再び頭をもたげ、地理学へ戻る気持ちを強くした。

吹き荒れていた大学紛争も下火になり、東京学芸大学の構内も落ち着きを取り戻してきた。3年生次に

は、満を持して地理学を専攻した。当時の東京学芸大学の地理学教室には、政治地理学の岩田孝三、工業地理学の山口貞夫、観光地理学の長津一郎、経済地理学・歴史地理学の松村安一、経済地理学(在来工業)の辻本芳郎、原真、集落地理学の小栗宏、都市地理学の山鹿誠次、自然地理学の有井琢磨などそうそうたる先生方がいらっしやう。全ての先生方が既に鬼籍に入られてしまったが、学芸地理学会と地理学教室が連携し、それぞれの先生方や外部講師には、講義とは別に巡検や講演会を行っていただき、解らないなりに筆者に学的満足感を与えていただいた。1969年の大学3年生次の秋には盛岡市での「臨地研究」があり、筆者は「盛岡市街地における道路分布現象に関する考察」をテーマに初めての論文を作成した。城下町から県庁所在都市への変貌過程で道路交通網がどの様に変化してきたのかを、都市構造との関連で考察したものであったが、未だ地理学の勉強が不十分であったため、満足がいくような出来ではなかった。その後、卒業論文のテーマと指導教官の決定をしなければならなかったが、卒論で「臨地研究」と同じテーマで、場所を変えて、同じようなことを続けていくことに辛抱と忍耐がなかった。そこで、卒論のテーマを選定するには、地理学教室の先生方がどの様な研究をされているのかを、自ら調べてみようと思ひ地理学教室の図書室でそれぞれの先生方の書かれた著作を読み漁った。当時の筆者にとっては、難解で内容を正しく理解するまでには至らなかったのだが、その中で、最も著作数が多いのと同時に、研究内容に心が引かれたのは都市地理学の山鹿誠次先生であった。山鹿先生の研究方法は、ご自身の居住地や勤務地などの身近な地域を克明に調べてモノグラフをつくり、その後研究地域を広域化させ、それらを一般化・体系化するという帰納法によるものであった。日本経済の高度成長期における都市の拡大実態を精緻に調査し、その体系化研究の先導的役割を果たした研究であった。

次に筆者の目を引いたのは、近世交通に関わる歴史地理学的研究と農林業・農山村を中心として研究されていた松村安一先生の著作であった。先生の発表された論文は、近世史関係や農学、林学など他分野からも、

参考文献として引用されていたのが筆者の心に留まった。農業や農山漁村などの村落の研究は、1960年代後半ごろから比較的低調になっていた。その頃、高度経済成長に沸く日本の都市と村落は、その差異が様々な面で低減されはじめていた時代であった。都市化の拡大というか同質化というか、こうした傾向は日本だけでなく世界的な傾向でもあった。そのせいか都市に関する研究は、学際領域も含めきわめて多かった。それに引き替え、農山漁村に関する諸問題は過疎化や都市化に伴う変貌の実態がしばしば取り上げられるとはいえ、村落構造や土地利用そのものについて正面から取り組んだものは乏しかった。そのような中で、筆者は都会育ちであるにもかかわらず、臨地研究の時のテーマとは異なって商工業や都市ではなく、農林業や農村を卒業論文のテーマに選んだのは、単なる天の邪鬼的性格だけではなく、都会に育ち都会に住んでいたからこそ、都会と異なった人々の生きざまに興味関心をもったからだと思う。村落が都市的要素の浸潤によってこれまでの村らしさを失っていくが、そのような過程に筆者は興味をもった。以後、都市との関連を内包させながらも、主として農業と林野の関わりを研究テーマにして歩んできた。卒業論文と修士論文では、多摩川の支流、秋川流域の農山村地域を対象として、利用と所有の変遷を指標にしながら、集落共有林や入会林野の機能と分解に関して研究した。

指導教官になっていただいた松村安一先生からは、林野と農業についての基礎的な視点と、研究方法の手解きをしていただいた。松村先生は丹念な史・資料の探索など実地調査に励まれ、1962年、東京教育大学から「近世青梅林業の成立及び発展に関する歴史地理学的研究」によって理学博士の学位を授与された。その後、先生は全国のスギ挿し木林業地域の形成と発展を技術史的な側面から体系的に明らかにされ、「林業地理学に松村あり」の名声を打ち立てられた。先生は目立つことや人と争うことを好まれず、「研究者には引退の時はない」を口癖に、黙々とご自分の研究に打ち込まれていた。

筆者の卒業論文は松村先生が加筆修正してくださり、徳川林政史研究所の1971年度紀要に、「山村における

組共有地の変遷」(松村・犬井1972)として掲載された。修士論文の一部も同様に、徳川林政史研究所の1972年度紀要に「東京都秋川流域における共有林野とその構造」(松村・犬井1973)が掲載された。これが私の学術誌へのいわばデビュー論文で、1977年に奈良大学の藤田佳久先生が『人文地理』の展望論文「入会林野と林野所有をめぐって－土地所有から土地利用への展望－」の中で、「・・・これらの研究の多くが入会林野と入会集団を包括的に把握しているのに対して、組単位の共有地をプロトタイプとし、その複数の共有を複合型とする分析を試みた松村安一と犬井正の研究は一つの提案でもあった。」(藤田1977)と取り上げていただいたのが、その後の研究を進める上で大きな励みとなった。

### 3. 社会科地理教諭と地理学研究の相克(1974～1985)

1973年に東京学芸大学大学院修士課程を修了した後、東京都立清瀬高校教諭として奉職した。「社会科地理」の教鞭を取るかわら、小金井市史、東久留米市史の編集委員を務めながら、関東山地や武蔵野の農業と林野の諸相を細々ながら調査、研究を続けてきた(犬井1979a, 1979b, 1979c, 1985)。

その後、1980年度の東京都教員研究生として、東京学芸大学地理学教室に派遣され、1年間地理学研究に専念できる機会を得た。その時に、長野県から東京学芸大学に赴任された市川健夫先生のご指導のもとで、埼玉県入間郡三芳町を対象として平地林の研究に取り組み始めた(犬井1991)。「日本のブナ林文化」を提唱し、全国の農山村を巡っていた市川先生には、調査行に同道させていただきながら、徹底的なフィールドワークを通して、事実を明らかにしていく研究方法を教えていただいた。それが、「武蔵野台地北部における平地林の利用形態」(犬井1982)として地理学評論に発表できた。フィールドワークと聞き取り調査を主体とし、学術用語として定着していなかった平地林を対象としたこの論文は、編集担当委員の早稲田大学の宮口侗廸先生の懇切丁寧なご指導と励ましがなければ地理学評論には掲載されなかったであろう。

再び、高校教員に戻ると、教科指導、生活指導、進

路指導など高校でのさまざまな仕事と、地理学研究の両立が難しくなり隔靴搔痒の日々が続いた。この頃、東京都立大学理学部地理学科を卒業された当時清瀬高校地学科教諭の三輪主彦先生の紹介で、民俗学者宮本常一先生が率いた近畿日本ツーリスト株式会社・日本観光文化研究所に出入りすることになった。そこには、高度経済成長に沸く1965～1970年代半ばの日本、とりわけ急速に姿を変えていく農山漁村の風景や暮らしの中に秘められた豊かさや知恵を探し求めて、ひたすら現地を歩き続けていた多くの若者がいた。地理学界を超えた人々との出会いにより、筆者の研究にとって、かけがえのない大きな刺激となった。

「私にとって旅は発見であった。私自身の発見であり、日本の発見であった。書物の中で得られないものを得た。歩いてみると、その印象は実にひろく深いものであり、体験はまた多くのことを反省させてくれる。」これは『私の日本地図』の第一巻「天竜川に沿って」(宮本1967)の付録に書かれた宮本先生の「旅に学ぶ」という文章の一節である。これは宮本先生の持論でもあり、日本観光文化研究所に集まる若者の誰もが幾度となく聞かされ、旅ゆくことを奨められた。同研究所は、宮本常一先生の私的な大学院みたいなものと形容した人がいるが、この大学院は学歴も職歴も年齢も興味関心の分野も一切を問わない、皆平等で来るものを拒まないところであった。それだけに旺盛な好奇心と情熱をもった多様な性向の若者が出入りしていて、一種独特なエネルギーに満ち溢れていた。田村善次郎、宮本千晴、山崎禪雄、三輪主彦、姫田忠義、森本孝、中川重年をはじめとした諸兄には、現実の世界を見、生身の人間とその生活を記述し、世の中に発信する術など様々なことを教えていただいた。私が執筆した「関東の平地林－農の風景」は『あるくみるきく』263号(犬井1988a)に掲載されたが、残念なことにこれを最終号として、この月刊誌は諸般の事情で廃刊になり、日本観光文化研究所も閉鎖されることとなった。ところが2011年に農山漁村文化協会から、幻の月刊誌となった『あるくみるきく』を地域別、テーマ別に編んだ昭和日本の風土記集に姿を変え、双書『宮本常一とあるいた昭和の日本』として刊行され、その第13巻「関

東甲信越③」に拙論が再録された(犬井2011)。「『忘れられた日本人』の著者宮本常一と薫陶を受けた若者たちが活写」と書かれた宣伝用の本の帯とともに、自分の若き日の新しいものへの渴望と背伸びの姿を改めて見つめ直すためにも、誤字や脱字だけの最小限の訂正にとどめ、これを筆者の「青春の息の痕」とすることにした。

これと前後して都立高校の社会科教諭の時代に、筆者にとって、もう一つの地理学研究の転機となる大きな刺激があった。それは、駒澤大学の上野福男先生が主宰する山村研究会に松村安一先生のご紹介で出席する機会を得たことである。山村研究会は、通常、国内の巡検や研究会を開いていたが、1978年8月に上野先生を隊長として2週間ほど、スイス・オーストリア・ドイツのアルプス山村に山地農業と移牧の調査に出かけることになった。筆者にとって、海外でのフィールドワークはこれが初めての経験で、上野先生だけでなく同行された愛媛大学の相馬正胤先生、熊本大学の岩本政教先生、香川大学の山崎和先生からも山村研究の方法や、日本と西欧の畑地の地力維持方式の違い、移牧をはじめ山地資源の利用方式、海外での調査方法などの手解きを受けた。その調査の成果は1979年の日本地理学会春季学術大会で発表した後、報告書を発行した(山村研究会1980)。

#### 4. 獨協大学での経済地理学研究(1986~)

東京学芸大学を退官し獨協大学に赴任されていた山鹿誠次先生と、集落地理学、特に武蔵野研究の大家である獨協大学名誉教授矢嶋仁吉先生の推薦をいただき、1986年に筆者は獨協大学に奉職する事ができた。前述したように山鹿先生の研究は、武蔵野をはじめとした東京近郊周辺都市の著しい変化を、「東京の衛星都市化」として把握し、都市地理学研究を内部の構造的な研究のみならず、都市の機能的結合関係、いわゆる都市体系研究へ先導する画期的な研究であった。私は農業・農村地理学の道を専攻したが、学生時代から、山鹿先生の著書・論文から多くのことを学ばせていただき、獨協大学に勤めて以降も長くご指導・ご助言を受け続けた。

その年に、東京学芸大学の市川先生と白坂蕃先生のご紹介で、筑波大学の山本正三先生にご指導いただける機会ができた。山本先生には現地指導を含め4年間の長きにわたるご指導をいただき、地域生態論的方法によりこれまでのフィールドワークをベースとした研究を関東平野の平地林としてまとめるよう助言をいただくとともに、理学博士の学位取得の機会をいただいた。筑波大学の奥野隆史、佐々木博、高橋伸夫、斎藤功、石井英也、田林明、手塚章、埼玉大学教授菅野峰明の諸先生方からは、研究の途中、有益なアドバイスや励ましのお言葉をいただいた。さらに、カタクリ研究の第1人者であった故鈴木由告先生(当時、東京都立上野高校生物科教諭)、そして植物分類学がご専門の獨協大学名誉教授加藤偉重先生から、平地林の植生について教えていただいた。

1989年度に筑波大学へ提出した学位論文“A Geographical Study on the Use of the Plain Forests in the Kanto Plain”の邦訳を主体とし、これまでに発表した犬井(1988b)や犬井(1988c)などのいくつかの論文を合わせて『関東平野の平地林』(犬井1992a)を出版した。関東平野の平地林は農民が作りあげ、長い時間をかけて維持、管理してきたクヌギ、コナラ、アカマツからなる農用林の二次林である。しかしそれが、1950年代中頃に始まる高度経済成長期以降、さまざまな条件の変化によって必然的に姿を変え、あるいは消失してきた。昔ながらの農用林として東京近郊の農村に残っているのは、落ち葉堆肥による地力維持を目的とした集約的疏菜栽培地域に限定されている。従来の農用林としての役割がなくなった平地林には、新たな役割を創出することが大切である(犬井1991, 1993)。

学位論文を提出した後の1990年には、女子栄養大学教授の栄養学専門の足立已幸先生からお誘いがあり、トンガ共和国の調査に出向くことになった。栄養学と医学と歯科の研究者が主体となって結成された文部省の科学研究費チームで、グローバル経済の中での食と健康がいかに変化しているのかを明らかにするのが目的であった。農林業の経済地理学的研究を主な研究テーマとしてきた筆者には、途上国の都市化、グローバル化が進む中で、いかに食と農がリンクしながら

変化するのかを明らかにする研究が期待された。伝統的な農業を営んでいる離島のアグロフォレストリーの調査を、フィールドワークをベースにして明らかにし、首都の位置するトンガタブー島の都市化、近代化が進んだ地域の輸出型農業との対比を行った(犬井1992b, 1996)。調査機材や大縮尺の地図が手に入らない地域でのフィールドワークの難しさや、英語によるコミュニケーション能力の向上が課題であることを、身をもって知らされた。

その後、1992年の夏から1994年の春まで、獨協大学の長期海外研修制度により、イギリスミッドランズのレスター大学地理学教室に派遣される機会を得た。レスター大学では国際地理学会(IGU)の持続的農村システム研究グループのチェアマンをしていたイアン・ボウラー博士の下で、EUの共通農業政策であるCAP(Common Agricultural Policy)下のイギリス農業と農村の土地利用の変化について研究をした。イギリスは第2次世界大戦後40年間続いた「食料生産偏重の時代」から、環境保全型農業を主体とした「脱食料生産偏重時代」へと変化の歩みを進めていた。共通農業政策改革と土地利用の変化に焦点を当てながら「集約化から粗放化」、「集中化から分散化」、「専門化から多様化」といった3つの農業的土地利用の変化の方向性に着目しながら分析を進めた。その結果、イギリスでは、農業生産拡大期の後、農村は、1)食料農産物の生産量を減少させ、2)農村の環境保全機能を有効にし、3)長期間にわたり持続可能な農村を創設するために農業の生産方法を変化させていることが明らかとなった。こうした変化は、EU域内での食料の過剰生産をなくすことや、環境保全型農業への転換、EU会計における農業補助金の経費を削減することなどが契機となっていた(Inui・Bowler 1995, 犬井2009)。

イギリスでの1年半の研究生活は、丁度、1992年のブラジルのリオデジャネイロで国連の「環境サミット」が開始された時で、その間、欧米の農業・農山村研究は、持続可能な農業・農村システムの研究を軸に動いていることを知り、筆者はある種の衝撃を受けた。日本における農林業・農村研究は、それまで着実に、しかも多方面にわたる実証的研究が蓄積され、成

熟期に達した感があった。こうした研究の多くは、地域農業ないし林業、あるいは村落の諸側面を捉える新しい視点を獲得してきたという点で、大きな成果が上がってきたことは確かであった。しかし、同時に農業ないし林業の地理学としての新たな体系化のための視点をさらに探っていかなければならない時期に至っていた(犬井1995, 2000)。

イギリスから帰国後の1995年8月19日～26日には、国際地理学会・持続的農村システム研究グループの第3回国際シンポジウムとして「持続的農村システムに関する筑波国際会議」が開催されることになった。筑波大学の佐々木博先生が組織委員長で筑波大学の斉藤功、田林明、国土館大学の長嶋弘道、早稲田大学の中嶋峯博、東京都立大学の菊池俊夫などの諸先生方とともに、筆者も組織委員の一員となった(Inui 1996)。歴史的な第1次円高の時日本で開催が危ぶまれた時期であったが、研究グループ代表のレスター大学のイアン・ボウラーをはじめ、外国からの発表者は40名にも上り成功裏に終わった。以後、日本の農林業・農村に関する経済地理学研究も、持続可能性という新たな視点が導入されるようになっていった。筆者の平地林研究も、人間活動と林野の関係性を重視し、里山という視点に立ち、研究を捉えなおした(犬井2002, 2005)。

同時に日本の農業地域や農村を労働生産性や土地生産性を指標にしながら、第2次世界大戦以後、現在に至るまで日本全体がどのように変貌してきたのかを、GISを援用しながら明らかにしてきた(山本・犬井・山本充・秋本1998, 犬井・山本充2005, 犬井2006a, 犬井・大竹2012)。また、グローバリゼーションが進展する日本農業と農業地域に関して、多面的機能や持続可能性という観点からまとめを行ってきた(犬井2006b, 犬井・大竹2011)。

さらに、NGOのマングローブ植林行動計画(ACTMANG)の向後元彦さんからは、ベトナムやエクアドルのマングローブ域で(犬井1997, 1999)、山本正三先生と前筑波大学教授の松本栄治先生からはアマゾンの熱帯林域で(松本・犬井・山本2010)、持続可能な開発という地球的規模の視点で林野と人間の関係性

を捉える機会をいただき、新たな研究の地平を開かせていただいた。

また、2007年に開所し6年間所長を務めさせていただいた獨協大学環境共生研究所では、持続可能な社会の創設とともに、地球規模の環境問題や地域の環境問題にどのように対処するかという実践的課題にも取り組む機会をいただいた。学術や地域社会の発展に貢献するのみならず環境教育の実践として本学の教育や生涯教育にも還元してきた。

## 5. おわりに

第二次世界大戦後の高度経済成長期以降、日本の各地は都市部に限らず農山漁村に至る国土の隅々まで、科学技術で裏打ちされた「都市的基盤」によって支えられ、便利で快適な生活が送れるようになった。便利で快適と感じている現在の生活は、自然資源の大量消費によって支えられている。それは、食料や医薬品などに用いる生物資源とともに、土壌、地下資源、水、大気といった非生物資源を大量に使うことによって維持されている。その結果、自然を再生不可能なペースで破壊し続けている。農林水産業といった第一次産業でさえ機械化や化学化がすすめられ、その資源こそ自然に依存しているが、農業機械や農薬、化学肥料、飼料に至るまで多くを現代の科学技術に依存しており、農山漁村での暮らしも都市的なライフスタイルを目指してきた。

人類の生存基盤である自然資源を、現世代だけでなく次世代も持続的に利用できる社会を築いていくためには自然生態系の保全が不可欠である。本質や全体像をとらえながら、歴史的時間によって鍛えられ、地域の風土に適した伝統的な環境保全アプローチを見直すことが、今、求められている。かつての里山などにみられた伝統的で持続的な生態系管理技術、細々ではあるが生産現場に伝承されている伝統的自然管理技術、総合的な視点の利いた地域生態論的知見など、日本やアジアの知恵や知識や技術の現代的な視点からの見直しと活用が必要である。今こそ大量消費型社会から、必要最低限の消費に抑えた「知足の社会」へと転換することが求められている。つまり、持続可能な社会

を築き上げるためには、これまでの大量生産、大量流通、大量消費、大量廃棄に支えられた過大な経済活動を見直し、環境の枠内での経済活動へと移行させることが必要である。そのために、経済地理学が果たする役割を提示しなければならない。

最近では経済地理学研究よりも、獨協大学学長として大学運営に携わる時間が大半を占めるようになってしまい、内心忸怩たる思いである。しかし、人と自然と建物の調和したキャンパス再編や、グローバル人材の育成を目指した教育内容の改革、地域との協働など持続可能な社会の創生と関わることも多くあり(犬井2013)、これまでの研究成果から得られた原理を適用しながら、大学運営にあたっている。

## 参考文献

- 犬井正1979a. 秩父山地における近郊山村の農林業の変化. 新地理27-1:13-23.
- 犬井正1979b. 東京大都市圏における東久留米市の発展.『東久留米市史』:757-771東久留米市.
- 犬井正1979c. 東久留米市の農業.『東久留米市史』:833-873東久留米市.
- 犬井正1982. 武蔵野台地北部における平地林の利用形態. 地理学評論55:549-565.
- 犬井正1985. 都市農業地域における露地野菜栽培の存在形態. 新地理33-2:11-27.
- 犬井正1988a. 関東の平地林一農の風景. 日本観光文化研究所 あるくみるきく263:4-29.
- 犬井正1988b. 那須野原台地西原における平地林利用の変容. 人文地理40-2:164-179.
- 犬井正1988c. 埼玉県川越市福原・名細地区の平地林利用の変容—市街化調整地域における平地林利用の事例. 経済地理学年報34-2:29-40.
- 犬井正1991. 平地林をめぐる人と農. 市川健夫編著『日本の風土と文化』:260-277. 古今書院.
- 犬井正1992a.『関東平野の平地林』古今書院.
- 犬井正1992b. トンガ王国の農業の変容—1985年農業センサスの分析を中心として—. 獨協大学教養諸学研究26-2:23-26.
- 犬井正1993.『人と緑の文化誌』三芳町教育委員会.

- 犬井正1995. 世界の森林資源と日本の役割. 農林統計調査45-7:24-29.
- 犬井正1996. 現代日本のアグロトレードを読む. 高橋伸夫・谷内達・阿部和俊『ジオグラフィー入門』:96-99. 古今書院.
- 犬井正1997. ベトナム南部カンザー地区のマングローブ林とその利用. 地理月報438:1-3.
- 犬井正1999. エクアドルにおけるタグアの利用. 獨協経済70:75-87.
- 犬井正2000. 日本農業の変貌. 日本統計協会. 統計51-9:17-22.
- 犬井正2002. 『里山と人の履歴』新思索社.
- 犬井正2005. 里山保全の方途一点から面へー. 農林統計調査55-1:17-22.
- 犬井正2006a. 日本農業における生産性の変化. 山本正三他編著『日本の地誌Ⅱ 人文社会編』:195-200. 朝倉書店.
- 犬井正2006b. 農業の多面的機能と持続的発展. 山本正三他編著『日本の地誌Ⅱ 人文社会編』:230-233. 朝倉書店.
- 犬井正2009. 共通農業政策改革によるイギリスの農業的土地利用と農村環境政策の軌跡. 環境共生研究2:1-12.
- 犬井正2011. 関東の平地林—農の風景. 田村善次郎・宮本千晴監修『宮本常一とあるいた昭和の日本13 関東甲信越③』:189-219. 農山漁村文化協会.
- 犬井正2013. 創立50周年とその後の50年に向けて「攻めの改革」を. 私学経営455:4-9. 私学経営研究会.
- 犬井正・山本充2005. 日本における農業生産性の地域的変動—1990～2000年—. 獨協経済80:1-23.
- 犬井正・大竹伸郎2011. グローバリゼーション下の日本農業・農村の持続的発展. 星野昭吉編著『グローバル社会における政治・法・経済・地域・環境』:335-344. 亜細亜大学購買部ブックセンター.
- 犬井正・大竹伸郎2012. 日本における農業生産性の地域的変動—2000～2005年—. 環境共生研究5:1-23.
- 山村研究会1980. 『アルプス山地の土地資源利用』山村研究会.
- 藤田佳久1977. 入会林野と林野所有をめぐって—土地  
利用から土地所有への展望—. 人文地理29:54-95.
- 松村安一・犬井正1972. 山村における組共有地の変遷. 徳川林政史研究所1971年度紀要:156-189.
- 松村安一・犬井正1973. 東京都秋川流域における共有林野とその構造. 徳川林政史研究所1972年度紀要:96-135.
- 松本栄治・犬井正・山本正三2010. ブラジルにおける熱帯産大豆の拡大と自然的基盤. 環境共生研究3:1-20.
- 宮本常一1967. 『私の日本地図 第1巻 天竜川に沿って』同友館.
- 山本正三・犬井正・山本充・秋本弘章1998. 日本における農業生産性の地域的変動—1980～1990年—. 獨協経済68:1-53.
- Tadashi Inui and Ian Bowler 1995. Agricultural land use in the European Union: Past, present and future. *Geographical Review of Japan* 68(Ser. B)2:137-150.
- Tadashi Inui 1996. Traditional Use of Woodlands in the Kanto Plain and Their Environmental Implications. *Geographical Perspectives on Sustainable Rural Systems*, Proceedings of the Tsukuba International Conference on the Sustainability of Rural Systems:122-129.

## Retrospection of the economic geography study based on fieldwork

INUI Tadashi

In this paper, the author examines economic geography study of Professor Inui Tadashi, D.Sc. It became clear that his attitude of economic geography study is the regional studies to which the way of his study was based on fieldwork are at the core. And it is not the deductive way that aimed at indoctrination but an induction method of research by regional studies.

Contents of this paper are as follows

1. Aim of this paper
2. The way to the geography frustration drew (1967-1973)
3. Conflict of a geography teacher in the high school and geography research (1974-1985)
4. Economic geography study in the Dokkyo University (1986- )
5. Conclusion